何が希望で何が幸福なのか

福本謙太郎

「あなたは今、幸せですか？」そう聞かれて、何人の人が本音で幸せですと答えれるのだろうか。

金がなくても生きていける。親がなくても生きていける。友達がなくても生きていける。家がなくても生きていける。仕事が無くても生きていける。でも、夢や希望がないと生きていけないのではないだろうか。幸せじゃないから、生きていけない。生きる望みがない。そういう人もいるだろう。本当の意味での生きる力とはなんだろうか。

たとえ、余命一日の重症患者でも、明日を夢みているだろう。もしかしたら治るのかもしれない。奇跡がおこるかもしれない。明日になったら特効薬が開発されるかもしれない、と考える。とっくの昔に諦めているはずなのに……自分自身の身体である。絶対に助からない、と解っているはずなのに……それでも「もしかしたら」と思ってしまうものである。

もちろん、世の中には、夢も希望もなく、それでも自らで命も絶てない者がいるのも事実だろう。それは、自分の意思もなく（意思があっても手も足も呼吸すらうまく出来ない）ただ生かされている植物状態のような人々の事ではなく、毎日毎日をあてもなくただ暮らす人である。多くの人は彼らを怠け者や愚か者と呼ぶだろう。

空き缶をひろってその日の生活を生きる人。もちろん、それらの人の中でも、自由ならそれでいい、楽しければそれでいい、何も深く考えずに気楽に生きているのがいい、「なんとかなるさ」という希望があるのだろう。

そういう人なら、幸せなのかもしれません。それよりも特に不自由もない、お金も家もあるけど、ただなんとなく生きているだけ。何も楽しくない。幸せじゃない。死にたい、でも、死ねない。そんな勇気もない。生きる気力もない人々。そういう人達ですら「甘え」という「希望」をもっているのかもしれません。ありえな

い事だけど、誰かが助けてくれるのじゃないか？　なにかいいことがあるのじゃないか？

自分で動きださなければ、何も変わらないのに……。それでも、そんなケーキにはちみつをかけるような甘い期待をしてしまう人々。

何も変わらない毎日をただなんとなく生きて、夢も希望もとっくの昔に捨てたはずなのに、死ねない者は、自分でも気づかないうちに、この世に夢や希望をもっているのだろう。それは、恐怖という希望であったり、不安という希望であったりする。だからこそ、自らで死を選ばない。もしも、あの世に希望をもっているのなら迷う必要がないからである。

刑務所で死刑を待つ人や終身刑の人もそうなのだろう。社会から隔離され、ただただ、死を待つのみの人生。これから先、夢も希望もない。何も掴むことすらできない両手。夢に向かって歩く事もできない両足。いらない身体。こんな生活ならいっそ死んだほうがいいと思っている人もいるだろう（もちろん現実には、自殺すら容易にできない状況なのかもしれませんが……モノがなかったり、常に監視されているので）。

そんな状況ですら、希望なんてないってわかっていても、頭では理解をしていても、きっと、もしかしたら……心の奥底で、自分自身でも覗けない、潜り込めない奥で、「生きる希望」のわずかな光があるのかもしれません。そういう想いがくすぶっているからこそ、精神的にも生きていけるのではないだろうか。刑務所の中でも何かを創ったりして、人間のやりがいを見つけたり。

そして、もしかしたら被害者に許してもらえるかもしれない。罪を償って生きていくという枷を自らに嵌めている人。辛い毎日を生きることで罪を晴らそうという希望をもつ人。償えばいつか救われると思う人。天国へ行けると信じる人。いつか脱獄して自由になってやるという夢を持つ人。真面目にしていれば、模範生で早く出られるかもしれないう希望を持つ人。こういう状況に堕としめた奴に復讐してやる、それまでは死ねんと希望をもつ人。様々な人々。神に死にたくないと頼む人もいれば、悪魔に頼む人もいるだろう。宗教が昔からあるのもその為であろう。人間自身が神や悪魔を創りだし、希望というものを目に見える形で現したのだろう。

人間はどうしようもなく弱い生き物だから、そんな都合のいいモノにすがる。それでも、どんな歪んだ形にしろ夢や希望があるからこそ人は、今を生きていけるのだろう。

ある人は、神に裏切られたのか？　はたまた悪魔に気に入られたのか？不幸を背負った者。人間の体の中で両手、両足、両目、両耳、口、の九箇所の内、片足をなくした人。多くの人は不幸だと言うだろう。しかし彼は、いろいろ悩んで最後にこう結論しました。九分の一の不幸せを嘆くより、まだ自分には、腕もあり目も見えるし、耳も聞こえるし、他人と話すこともできるから、九分の八の幸せを感じて生きていくと言った。

彼は、本心で言ったのか？　幸せを感じたのか？片足がない。普通の人より幸せになんかなれない。それでも……強がって、「幸せだ」と思い込んでいるだけなのかもしれない。

人間というものは、どこまでも醜く汚い。結局他者と比べて優越感に浸って、幸せを感じているのだろう。

足の無い人を指差しては

「あんたには、足があるでしょ、それだけで幸せなのよ」

家の無い人を指指しては

「あんたには、家があるでしょ、それだけで幸せなのよ」

親の無い人は指差しては

「あんたには、親がいるでしょ、それだけで幸せなのよ」

もっともっと不幸な人はいるのだから頑張りなさい。努力ではどうしようもできないものがある。運命とでもいうような、人智の及ばないもの。普通はそれらを呪い、不幸を受け入れるのだろう。

もしも、もしも彼がほんとうに幸せを感じて生きていけたのなら、本当に強い人間なのだろう。そして、彼にはその強さを得た何かがきっとあったはずだ。人は支えなしでは生きていけない。それが何かは、人それぞれだろう。

一般的なのは家族であったり、地位や名誉であったり、人としての誇りであったり、音楽であったり、車であったり、お金であったり、復讐であったり、何かが、彼を強くさせたのだろう。

もちろん、本心なんてものは、誰にもわからない。綺麗事なんていくらでもいえるのだから。そしてそれは、本人ですらわからないものなのだろう。

本望ではない。自分の望んだ結果じゃない。でも、どこかで区切りをつけないといけない。つまり、そう考えないと生きていけない。死から逃れるためには、現実

を受け入れないといけないから。無いものをねだってもしょうがない。
だからこそ、足が無くても「幸せだ」と言い切ることによって、なによりも自分自身を誤魔化す。自分自身をも偽る。そして、錯覚を起こすのだろう。幸せだと・・・。
それが、人の強さというものなのかもしれない。なぜなら、その窮地にすらたどり着けない人々も数え切れないほどいるのだから。
何もかも受け入れられず、自暴自棄になり、そして生から逃げるために死を受け入れる。幸せを感じられない人々。どうすることもできない。その人には、その人にしか理解できない、魂というものがあるのだから。
事故で足を無くしても、絶望しない人もいれば、顔に少し傷が付き絶望する人もいる。十八億も借金しても優雅な生活を続けようとする人もいれば、十万借金しただけで生きる気力を失う人もいる。年収十万で暮らす人もいれば、リストラされて首を吊る人もいる。浮気をされてもやり直す夫婦もいれば、浮気をしてもいないのに離婚する夫婦もいる。
それぞれの幸せや不幸せ、その価値観というものは、人それぞれである。そして、絶対に覆すことができないものである。
いや、絶対ではないのかもしれない。限りなく絶対に近いだろうが、例えば、宝くじに当たったり、余命あと一年と宣告されたり、いきなり戦争が始まったりなど。普通では
あり得ないような事に直面すれば、人の価値観をも容易に変える事ができるのかもしれない。
だが普通の生活では、あり得ないことである。なぜなら、価値観を変えるということは、今までの自分を全否定する事に似ている。つまり自分ではなくなるからである。変わること……誰もが変わりたいと思っても、人は変化を無意識の領域で嫌う。自分でなくなるのを怖がるからだ。だからこそ、それぞれに信念があるからこそ、他人の価値観を中々理解できない悲しい生き物なのだろう。
結局のところ、人の価値観もその人のモノであり、希望も幸せもその人次第である。それが分かっていても、どうしても自身と違う考えを目の当たりにすると、「あの人はちょっとオカシイんじゃない？」「ああいう人って普通と違うわよね」などと陰口を言われたりするものだろう。
そして、それが嫌で多くの人は自分自身の価値観を偽って他の人に合わせてしま

うのかもしれない。しかしそれは、自分自身を欺き、偽る事になるのだから、やはり人に何を言われても、気にしない、強い心で価値観や信念を曲げない生き様が大切だろう。